保育園での学級介入による特別な支援を必要とする幼児の活動参加の促進

○宮内 絢香　　村中 智彦
（東京都立矢口特別支援学校）　（上越教育大学　臨床・健康教育学系）
KEY WORDS: 学級規模介入　保育　やりとり

【目的】特別な支援を必要とする幼児１名が在籍する公立保育園の年長児学級において、クラスワイドによる介入（class-wide intervention、学級介入）を実施し、参加児の保育活動への参加促進を試みた。実践を通じて、学級介入が特別支援を必要とする幼児と他幼児の参加状況や仲間同士の働きかけに及ぼす効果と関連要因について明らかにすることを目的とした。

【参加児と学級、保育体制】公立保育園の年長児学級に在籍する男児 10 名､女児 6 名の計 16 名(Participant､以下、P1～P16）であった。そのうち、園から特別な支援を必要とする 5 歳の男児 1 名の P1（研究期間中に ASD の診断）が挙げられた。担任より、他の年中や年少児に比べて学級全体として落ち着いて保育活動に取り組む状況が少なく、毎日のように些細な仲間同士のトラブルは生じるという報告があった。一斉指示の聞き逃しや個別指示を必要とする幼児が多かった。担任は、保育士歴 20 年以上のベテランの 50 歳代女性であった。女性の加配保育士 1 名が配置され、P1 への個別支援と学級全体への支援を補助的に行っていた。

【介入デザイン、標的場面】期間は､4 月～11 月の 8 ヶ月。第 1 著者は支援者となり、観察・記録を行い、介入時に担任が行う手続きの補助を行った。アセスメント、ベースライン（BL)、介入①～④で構成した。アセスメントでは、対象学級と標的場面選定のための直接観察を行った。園や保護者全員の同意のもと、介入場面をビデオ記録した。BL では､P1 や学級全体に対して活動参加を促すための特別な手続きを導入しなかった。アセスメント結果より、標的場面を給食準備から片づけ・歯磨き場面とした。仲間同士で声を掛け合い、時計を見て準備や片づけをする、給食準備・片づけの時間を短くする、全員で歯磨きに参加するの 3 つを支援目標とした。

【介入手続き】介入①（約束カード・模型の時計）では、給食準備・給食・歯磨きの各場面でのめあてを約束カードとして黒板に貼った｡めあては､タオルを出して手を洗う、などであった。準備開始前に担任が準備の約束 3 つを読み上げ、担任は目標時間を全員に伝えた。目標時間になると「○グループさん､準備は良いですか？」と確認を行った。介入②（グループ評価）では、担任の「○グループさん、準備は良いですか？」の確認の際に、グループ全員が準備を終わらせ､「いいです」と応答できた場合に無地のシールを 1 枚貼った。シールが 10 個貯まると、グループ全員がキラキラのキャラクターシールを 1 枚もらえた。介入③（挙手による自己評価）では、担任の確認の際に参加児は､「いいです」の発言と同時に挙手する手続きを加えた。介入④（担任による評価）では、担任の確認の後に､「お友達に声をかけてくれた人はいますか？」と聞いた。友達に声をかけた参加児は挙手した。

【分析】参加児 16 名の活動参加の状況を把握するため、給食準備場面における課題分析を行い、ビデオ記録に基づいて、各項目についてプロンプトレベル（レベル)、担任の一斉指示で参加した割合、各活動の所要時間、参加児の仲間への励ましや促しなどの生起数を記録した。

【結果及び考察】参加児全員の活動参加の状況より、活動参加が良好（H 群)、中間（M 群)、支援が必要（L 群）の 3 群に分けて評価した。介入①において、学級全員の参加率のレベルは、BL に比べて高まる傾向が認められた。H 群の参加率は、BL で高く介入①でも高いレベルを維持した。M 群の参加率は、介入①の導入後には上昇したが、その後 BL と介入①で同じレベルであった。介入②になると、仲間の支援による参加率が高まった。L 群の参加率は、仲間の支援の参加が高まった。Fig.1 に示した給食準備、給食、片づけ時間の所要時間は、BL に比べて介入①で短縮した。P1 では介入①～③で BL と同じレベルであったが､介入④になると担任や加配の支援が減少し、仲間からの支援が多くなり、参加率のレベルが高まった。Fig.2 に、2 グループにおける仲間同士のやりとりの生起回数を示した。BL では仲間同士で声を掛け合って準備を促したり、励ましたりする行動は見られなかった。介入①では、約束カードに明記された内容に関する言葉がけ､「タオル出すんだよ」「お弁当こっち」などが認められるようになった。しかし、介入①では次第に生起数が全グループとも､BL と同様の結果となった。介入②では､「早く」「シールもらえないよ」が増加し、介入④では、「早く」「急いで」の急がせる言葉がけが減少し､「がんばれ」「あと少しだよ」の励ましが増加した。

介入①の約束カードと模型時計の導入によって、学級全員の参加率が高まり、所要時間も短縮し給食準備が早くなった。活動の開始や区切りが明確となり、担任の一斉指示が通りやすくなったと考えられる。挙手によるグループ評価と自己評価、担任の称賛は、グループ全員の参加に伴って強化が随伴される集団随伴性（group-contingency）の事態を生じさせた。この事態によって、学級全体の仲間への促しや励ましが増加し、仲間に合わせて効果的な促し方に修正することも認められるようになったと考えられる。

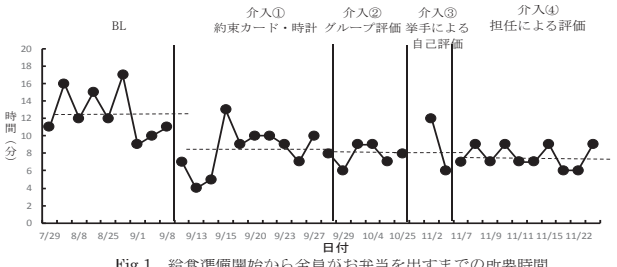

Fig.1　給食準備開始から全員がお弁当を出すまでの所要時間

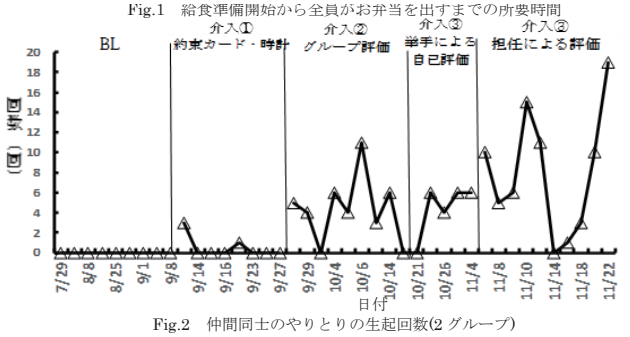

Fig.2　仲間同士のやりとりの生起回数(2 グループ)